広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	イマジネーションの構成を通して老境の推量にいたる ： 「茂作じいさん」の詩を使って
Author(s)	葛西, 琢也
Citation	児童の言語生態研究 , 18 : 97 - 108
Issue Date	2018-10-27
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046614
Right	
Relation	

授業レポート

構え 情感 6年生

イマジネーションの構成を通して老境の推量にいたる

――「茂作じいさん」の詩を使って――

葛西琢也

1. はじめに

詩が、ある一つの情緒の組織と躍動と完全さをうたうものであるとするなら、そのセンテンスの語順の乱れは許されない。たとえば、この茂作じいさんおよび、この状況を、この詩人ならずとも、見た人は大勢いたはずである。つまり、詩の素材を見ることにおいては、詩人もそうでない者も変わりはない。変わるのは、その情緒の組織と躍動とを完全たらしめるかどうかにある。このことを具体的操作において、試みてみようとしたのが次の方法である。

「国語教材研究序説」上原輝男

詩「茂作じいさん」小林　純一（光村5下・昭和46年）を13の短冊にしたものを正しく整序することを、ここでは具体的操作としています。長い間懸案であったこの授業を、この度は、イマジネーションの問題として捉え直してみた取り組みの報告です。

茂作じいさん

茂作じいさんは、歯が一本もない。
茂作じいさんは、九十五歳だ。
茂作じいさんは、一日家の前で沖をながめている。
ときどき、古ぼけた望遠鏡をのぞいては、
もごもごと何かつぶやいている。
何を言っているのかわからない。
けれども、みんなは知っている。
茂作じいさんが何を言っているのか。

茂作じいさんの深いしわだらけの顔が晴れ
晴れしているとき、
茂作じいさんは、こう言っているのだ。
――潮がいいぞ。
――魚の群れがあるぞ。
その日には必ず、
船が赤い旗を立てて、
船足重く帰ってくる。
銀色の魚でいっぱいになっている。

茂作じいさんの落ちくぼんだ目がうつろに
開かれているとき、
茂作じいさんは、こう言っているのだ。
――潮が速くてだめだ。
――魚は一ぴきもいやしない。
そんな日には、
船はいたずらをした子どものように、
しおれて帰ってくる。

茂作じいさんは、もう漁には行かれない。
一日海をながめている。
明け暮れ海をながめている。
ながめていれば気がすむ。
茂作じいさんは、髪の毛が一本もない。

ふり返ってみて、今後への課題ばかりが

残った授業でしたが、この詩が持つ完璧な意識の継続と構成とが、子どもたちをイマジネーションの触発へと導く期待は大きかったのです。

日　時　平成24年8月30日・木　10時35分～

児　童　広島県東広島市立三津小学校
第6学年級
男子12名　女子13名　計25名

授業者　児童の言語生態研究会会員によるチームティーチング

2．指導案検討会議から（抜粋して構成）

瀬底　茂作じいさんが座っているだけで、見えているものがある。で、なにかもごもごとつぶやいている。何を言っているのか分からない、でもみんなは知っているんだって。じっと座ってるんだけど、湧くような体感というのかしら、それを茂作じいさんは味わっていて、ただ座って望遠鏡をのぞいているだけで世界を見ている。そこで生きているというようなことが子どもたちに分かるといいな。

波の動きを見るだけで血が湧き上がるとか、悲しい気持ちになるとか。そういう世界を見ている。イメージの広がりの喜び、怒り、悲しみとか、感動とかね。そういうものがあって、それをことばとして受けとめている。じっとしながら、その世界に生きている。どこにも行けないんだけど、ものすごく広い世界の中で生きている。

葛西　上原先生が「国語教材研究序説」で取り上げて、いわゆる整序法を用いることを提案している。ただ、未だにきちんとした指導案をわれわれは作っていない。今まで何度か試みたけどね。一方で、イマジネーションの授業研究を10年以上続けて来ているわけだけど、「茂作じいさん」をこの延長線上に据えていいのではないかと思う。去年、方法論として図を利用した。今年は、「対」として扱えるだろうと。これは先生も指摘している。

中川　詩に形式があるじゃないですか。その形式に当てはめてみようということだと思うんですよね。全部短冊にしたときに、その形式が取れるか。対の形式できちんとしているので、むしろ形式を取っていくことによって、外側と内面を学ぶことができるし、上原先生に言わせれば「これしかない」「この順序しかない」というふうに思える。そこをきちっと組み立てることによって、その組み立てる力を借りて内面が分かる。そういう手段を取ろうとしてるんじゃないでしょうかね。

葛西　13枚の短冊にして、並べさせると真ん中の2連と3連は7～8割の子はまとめる。問題は1連と4連が両脇で対を作っているということ。

瀬底　茂作じいさんの現実と、茂作じいさんの見ている世界の、その区別をさせるということよね。

小林　なぜばらばらのものを復元することによって発見できるのかっていうことが説明できないといけない。ただ丁寧に辿っていったからといって発見できるとは限らない。（ここで、「魂にふれる」若松英輔　32頁の一部を紹介。その最後の一節）―「色読」とは、異界へと「往き」、また、「還って」くる営みである。「読む」ことそのものが、現象界と実在界への往復運動となる。―

瀬底　その中に詩のことが書いてなかった？

―古代、歌を詠むとは、言葉によって魂を「振る」、すなわち魂を動かし、触れる営みである。風が木の葉を「振る」ごとく、言葉は、魂に触れることができると信じられていた。そこに譬喩を読み取ってはならない。「魂振り」とは、そうした言葉の秘儀を示す表現である。（省略）―ことばによって魂を「ふる」って、ことばは魂にふれることができる、これよね。

「白秋望景」川本三郎で、景色の中に人は生きているというのね。だから、これも一つの景色だと思うの。おじいさんが座っ

ている、そして望遠鏡でながめている、ぶつぶつなにか言っている。その言っていることの内容、座っているおじいさんが浜辺にいて、その人の持つすごい世界というの？それを子どもたち整理できるといいな……、ある点では。そしてまた遠景に戻っていって、おじいさんはこうなんだという仕組みね。

葛西　この浜に住んでいる人には共有できる景色なんでしょう。だから、何を言っているか分からなくても分かるという。それは視覚で見たということじゃないんですよね。さっきから瀬底さんが言っている体感。

瀬底　だから、ことばというものの持っている力というか、世界を、このおじいさんが、「潮がいいぞ、魚の群れがあるぞ」って言うと、みんなにみえてくるっていうのかしら。そういうおじいさんの詩というかことばかな。だから、詩と言葉って密接なんだなって。言葉を集めるというか、言葉に生きるというか。

瀬底　もちろん、この対が分かればいいんだけど、私は、おじいさんという現実があって、そしておじいさんの世界があって、で、それは望遠鏡の中の世界なんだけど、それがものすごい広がりで、そしてまた、ふうっと戻って来て、おじいさんが、明け暮れ眺めていれば気が済むっていうね、その世界に戻ってくればいいんじゃないかと思うの。髪の毛と歯がくっつこうがくっつくまいが……。

中川　でも上原先生は、これが完璧に分かってないと詩が分かったことにならないと言ってる。「もごもごとつぶやいている」だから、歯が1本もないから、もごもごなんだから、歯が前に来るかなって、そういう風に考えていくと分かってくるのよ。試行錯誤していくうちに、おじいさんを外から見てるな、とか、これは内側だなということがだんだん分かってくる。分かってこないとこういう配置にならない。外側、歯と髪の毛を二つ並べてもしょがないなと。瀬底さんがいったようなことが、並べていくうちに、だんだんと詩全体が見えてくるんじゃないかしらそれがねらいなんじゃないかしら。だから、どこにどれが来てもいいんだよ、とはならない。

小林　先生がすごいこと書いてるんだけど、「詩が、ある一つの情緒の組織と躍動と完全さをうたうものである」って。子どもが素直であれば、情緒の組織と躍動と完全さに出会うことができるんだよね。言葉を媒介にして、景色が浮かんで、その景色の中に自分も溶け込んでいって、おじいさんが感じている波の音とか、おじいさんが感じている潮風とか、おじいさんが見ている海の先とか、そういうものに一緒になれるということが共鳴してるってことだよね。それが「魂振り」というか、おじいさんや小林純一さんは死んでいるかも知れないけど、死者の声に耳を傾けるというか、気づいていくことなんだよね。ばらばらにして組み立てることで、最高に出会えると私たちは思っているけど、上原先生もそれ以上の方法はないと思っているわけじゃない。だけど、一般的にはそうではない。

瀬底　言葉で表された一つの世界に行ってかえってくるということよね。

小林　迷路で迷って、運よく出られたり、逆に出られなかったりするんだけど、そうじゃなくて、この迷路はどのようにできているのか、それが分かれば出口も入り口も分かる。

中川　構成をするということは、俯瞰になるんじゃないかと思うのね。対とかをおもしろがって発見していくんだけど、発見した後、もう一度上から俯瞰するっていうのかな。迷路だって、俯瞰できないと発見できないんだから。

長浜　この前の資料に「茂作じいさんに近づく」とあって気になってるんです。だんだん構成がしっかりしてくると、茂作じいさ

んはただのじいさんではないということが見えてくるんですよね。引退したおじいさんだけど海のことをすごくよく知っているし、長年の経験のすごさみたいなものが分かって来るし、なぜか知らないけど、みんなに愛されているということまで分かってくる。茂作じいさんの印象が迫ってくるような、茂作じいさんの美しさみたいなものが、作っていくうちに感じ取られてくるような授業を考えている。

葛西　資料の最初のところに「意識の構成がこういう順序をふんでいる」「意識の構成は順序だっていなければのびない」とある。茂作じいさんの景色に至るためには、この順序でなくてはだめだと言ってるわけですよね。

瀬底　やっぱり言葉だね。「こう言っているのだ」の前が「何を見ているのか知っている」「何事かつぶやいている」「歯が一本もない」ってつながっているんだね。だから、「もごもご言っているおじいさん」にすーっと入っていってそれで「何を言っているか知らないけれど、みんな知っているんだ」その世界はこういう世界なんだ。そうなんだーって、でいってかえってきて、でも、おじいさん、「漁には行かれない」「でも眺めていれば気がすむんだ」で、「髪の毛が一本もない」というところに戻ってくる。意識の構成というか、目にするところと耳にするところへと巡っていくっていう感じがする。

〈授業で用いた13の短冊〉

① ときどき、古ぼけた望遠鏡をのぞいては、もごもごと何かつぶやいている。

② ―潮が速くてだめだ。
―魚は一ぴきもいやしない。

③ 茂作じいさんは、歯が一本もない。

④ ―潮がいいぞ。
―魚の群れがあるぞ。

⑤ 何を言っているのかわからない。
けれども、みんなは知っている。
茂作じいさんが何を言っているのか。

⑥ そんな日には、
船はいたずらをした子どものように、
しおれて帰ってくる。

⑦ その日には必ず、
船が赤い旗を立てて、
船足重く帰ってくる。
銀色の魚でいっぱいになっている。

⑧ 茂作じいさんは、九十五歳だ。
茂作じいさんは、一日家の前で沖をながめている。

⑨ 茂作じいさんは、もう漁には行かれない。

⑩ 茂作じいさんの深いしわだらけの顔が晴れ晴れしているとき、茂作じいさんは、こう言っているのだ。

⑪ 茂作じいさんの落ちくぼんだ目がうつろに開かれているとき、茂作じいさんは、こう言っているのだ。

⑫ 茂作じいさんは、髪の毛が一本もない。

⑬ 一日海をながめている。
明け暮れ海をながめている。
ながめていれば気がすむ。

3. 授業の構想

最終的に固まった授業の構想を指導案から転載したい。

「詩は、ある一つの情緒の組織と躍動と完全さをうたったものなのである」からこそ、そのセンテンスの語順の乱れは許されないのである。「茂作じいさん」の構成を考えてみると、真ん中の二つの練が、茂作じいさんの

内面（目に見えない世界）を「対」の形式でうたい、1連と4連は、茂作じいさんの遠景（見える世界）を、2・3連をはさみ込む形で、これも「対」の形式でうたっている。まず1連で、読者は茂作じいさんの現実に接し、2連・3連で、茂作じいさんの広くて深いイメージ世界を旅し、4連でまた、現実の茂作じいさんを見るわけだが、実は、この茂作じいさんは、元の茂作じいさんではない。

子どもたちは、言葉を媒介にして、茂作じいさんの感じている波の音とか潮風とか、茂作じいさんの見ている海の底や海の向こうなどと一緒になった時に、まさに、「老境の推量」への扉が開かれたことになる。それは、子どもが自由に伸びやかになっていくことを実感し、自分から抜け出ることにつながる。

「茂作じいさん」は、その世界が完璧であるからこそ、読者をそこまで誘うことができる。

本授業で、詩の文の断片（短冊）を、子どもたちに構成させるという方法をもって展開するのは、そういう理由による。

4．授業の展開

導入　本時のねらいと方法を理解するために「ぞうさん」まどみちお　を使い乱序の詩を正しく並べることで、詩の構成を考えました。

1．あのね　かあさんがすきなのよ
2．ぞうさん　ぞうさん
　おはながながいのね
3．ぞうさん　ぞうさん
　だれがすきなの
4．そうよ　かあさんもながいのよ

正しい順、2・4・3・1を確認した後、3・1・2・4ではいけないの？と問いました。これに対し「反対にすると、思っていることをきいてから、ことのことを聞くことになるのはおかしい」と、その根拠が指摘され、また、別の意見も出されました。こうしたやりとりによって、子どもたちは、詩の構成とはなにかに気づいたように思います。

（1）対を作る

「茂作じいさん」を13枚の短冊にして、封筒に入れて子どもたちに持たせました。「この中に、ばらばらにした詩が入っています。よく読んで並べ変えて下さい。」

「ぞうさんの詩を正しく並べた時のように、構成を考えるとうまくいきます。」

長浜　2枚でも3枚でも構わないので、このつながりには自信があるというのを発表して下さい。

きよ　1・5・10・4・7・11・2・6の順に黒板に短冊を貼る。

長浜　8枚も並べてくれたけど、きよ君と同じように並べた人いますか。

ふじ　1・5・10・4・7・11・2・6です。

長浜　まったくきよ君と同じだということだね。ほかには、

やま　10・4・7と11・2・6が同じです。

長浜　10・4・7というつながりが出来た人はどれくらいいますか。

（半分以上の子どもたちが挙手）

では、11・2・6というつながりが出来た人は？

（半分以上挙手）

そうするとこの三つを繋げた人が圧倒的に多かったね。では、みんなの意見の多かったところを見ていこうか。

やま　10・4・7とか11・2・6の時は、最初に「茂作じいさんはこう言っているのだ」と言って、次に茂作じいさんが言っている言葉が来て、その言葉のあと、つながりがあるところが次に来ているのだと思う。

長浜　言葉ということだね。まず、10・4・7で言葉ってどれ。

やま　「しおがいい」っていう4番。

長浜　11・2・6では、おじいさんの言葉ってどれ。

やま　2番です。

長浜　10・4・7では、言葉がここにきていて、11・2・6ではここに来ている。4はこっちに来ないで、2はこっちに来ないのはどうして？（言葉を逆にしない理由を問う）

やま　潮の流れがよくて魚の群れがあって、いっぱい釣れるときの場面が7で、潮が速くて魚が1匹もいないときの場面が6番なのでつながっていると思います。

長浜　やまさんに付け加えることありますか。

まえ　10番の「深いしわだらけの顔が晴れ晴れしているとき」ってあって、晴れ晴れしているのがうれしいみたいで、うれしい感じの言葉を探したら、「しおがいいぞ　魚の群れがあるぞ」で、それにあてはまるのが「その日にはかならず…」という7があって、それで10・4・7のかたまりが出来ます。11番の「落ちくぼんだ目がうつろに開かれているとき」というのは、なにか悲しそうな場面で、それに当てはまるのは「しおが速くてだめだ　魚は1匹もいやしない」で、それに当てはまるのは「そんな日には、船はいたずらをした…」って、魚が捕れない場面が出来るので、10・4・7のかたまりと11・2・6のかたまりが出来ました。

いけ　10は「晴れ晴れして」うれしい感情が表れていて、それに続くのが4で、7には、「銀色の魚でいっぱいになっている」とあって、それはつまり大漁ということで、6は、「そんな日には、船はいたずらをした子どものように、しおれて帰ってくる」ってあるので、1匹も獲れず悲しいという感情が表れているので、私はそのかたまりにしました。

やま　今の意見、そっちかもと思っているんですけれども。こういうのも一理あるかなと思っていることがあって、9に「茂作じいさんは、もう漁にはいかれない。」とあるから、漁に行っている人達がうらやましくて、魚が釣れんでいいや、みたいな感じになっている。もし、うらやましいという感情があったら、10番と11番が反対になるのもあるかなと考えました。

長浜　その時に、9はどこに入ると思ったの。

やま　5と1と10の間とかに入ると思います。

長浜　皆さんの意見がはっきりしてきたと思いますので、確認してみましょう。10・4・7でうれしさみたいなものを表しているまとまり。11・2・6で悲しいというかうれしくない気持ちをあらわしている。この二つの関係をどんな関係と言ったらいいかな。

きよ　対になる言葉です。

長浜　対という言葉が分かる人。（7～8人挙手）どんな漢字を書くかというとこう書きます。（黒板に「対」と書く）この漢字はどんなときに使うかな。

C　反対。

長浜　反対ということだね。反対の意味でつながっているということだね。反対の意味が隣同士になっているんです。こういうのを対の関係と言います。この対という関係、構成は掴むことが出来た人が多かったということになります。

（「対」でまとまった2連・3連の6枚の短冊をまとめて線で囲っておいた。17人が対でまとめていた。）

（5分間の休憩）

（2）対の前後を考える

葛西　ここから選手交代です。きよ君は8を最初に持ってきたいのね。

きよ　間に色々入れてるわけです。

（前に出て来て黒板上の短冊を並べる）

8・12・3・9・13・1・5で。1と13がつながるとしたら、9が13の説明になるから、そして、8が歳を説明しているので一応最初に来ると思うので。それから、12と3は上から下へ向かっている。

葛西　上から下。顔を上から下へ見ているということね。それを聞いてほかの意見あり

ますか。

みや　ほとんどきよ君といっしょなんだけど、最初が違って、8・9・13。その理由は8番の左側に「一日家の前で沖をながめている」とあって、だからおじいさんは漁に行かれなくて、その気持ちを晴らすために明け暮れ海を眺めていることで、気を済ませていると思う。そういうつながりがあると思いました。

子どもたち　わかりました。

まつ　3・12・8。茂作じいさんは、歯が1本もない、髪の毛が1本もない、95歳だとしたい。

まえ　ほかの意見があります。3・12・9はいらない。（きよ君の考え、8・12・3・9・13・1・5を見ての発言）

長浜　どこにつけるの。

まえ　13のあとに9。1のあとに12がきて、その後に3が来る。

葛西　きよ君の考えから始まって、みんなはこの詩をどこから始めるかということを考えているように思う。そこに集中しているように思います。

りみ　わたしは、3番。

葛西　ほかに、3番から始めた人いますか。いない。貴重な意見です。

りみ　3から始まって12・8、あとはみや君といっしょです。こうすると、茂作じいさんの紹介から始めてる感じがするから。

葛西　りみさんは、こう考えて始めたというのだけれど、さあ、終わりもどうするかを合わせて考えてほしいと思います。

やま　私は、10・4・7と11・2・6のあと、一番最後に5番を持ってきたいと思う。

中川　ああ、対のあとにね。

葛西　始まりを考えているんだけれど、始まりを考えることは、終わりも考えることになるんだね。新しい意見が出ました。それを聞いて、おっ、まえさん。

まえ　12番の「茂作じいさんは髪の毛が一本もない」から始める。だって、だって、歯がないから何を言っているか分からないのだと思う。

＊子どもたちは、言葉のつながり、或いは茂作じいさんの姿と態度、行動を手掛かりに、しっかり考えていることがよくわかります。友だちの発言をふまえて、さらに追求する。それだけに、授業者としては指導案の計画に従い、この詩が4連で構成されていることを早くに告げるべきでした。

（3）2組の対で構成されていることを告げる

中川　今日の勉強は、「詩の構成を考える」ということでした。そのために13枚の短冊をくっつけてもらった。そしたら、みんなすばらしい。ここをみて、対を見つけてくれました。この詩の構造は対が仕組まれているということなんです。この前にも何かあるんじゃないかと、みんなは思っている訳ね。このあとにも何かあるんじゃないかと思ってる訳ね。番号をつけちゃいましょう。1連、2連、3連、4連といったね。みんなが作った真ん中は、2連と3連なんです。対になっている。で、残りは1連と4連がある。ここが対ならば、こちらも対になっていると、こういうことなんです。みんなはここのところ（2連3連）こうしてできたから、先生たちすごいなと思っています。

それでは、本当に対になっているのかなというところを出してみましょう。

（黒板上に、本来の整った詩を掲示）

C　オッ、歯が一本もない。

C　髪の毛で終わっとる。

葛西　では、声に出して読んでみましょう。

（全員で声に出して読む）

葛西　これに近い並び方をした人いますか。

（挙手なし）そう、じゃあ最後に考えてほしいこと、ここ1連4連と、内側の2連3連の違い。何が違うでしょう。

やま　対の言葉の前のところはどっちかとい

うと、茂作じいさんを見れば分かることだから、周りの人の意見だと私は思っていて。対の後の言葉は眺めていれば気がすむとなっていて、気がすむというのは周りの人が見ていても分からないことだから、どっちかというと茂作じいさんの気持ち。

まえ　周りの人から見た茂作じいさん。

葛西　この1連、ひと言で言えば何を言っているのでしょう。

まえ　茂作じいさんがどういう人か。見た目。

葛西　見た目。姿だね。

この中と（2・3連）外（1・4連）の関係をもう少しはっきりさせたい。赤線で囲った内側と、青で囲った外側とは何が違うでしょう。

きよ　中は、周りの人の想像だと思う。「もごもごとなにかつぶやいている。なにをいっているのか分からない。」というのは、想像だと思う。

葛西　なにを言っているのか分からないのに、分かっているというのは、この中は想像でないのかというのが、きよ君の考え。

中川　これが想像なの。これは、茂作じいさんの姿だったり、見た目だったりする。するとこれは。

C　現実。

葛西　そうすると、この茂作じいさんの詩は、どういう構成になっていることになりますか。現実で想像を包み込んでいる。サンドイッチにしてると言ってもいいかな。さて、最後にぶつぶつ言っている、もごもごつぶやいているというのだけれど、なんといっているのか答えてもらいます。それから、この詩の題名を何とするか。

（用紙配布）

中川　茂作じいさんになったつもりで、考えて下さい。これは茂作じいさんのいつのことなの。この想像の世界は、時間は、なに、今なの。

C　むかし。

中川　いま、昔といってくれたよね。昔のことを、ぶつぶつ言ってるのじゃないかと、想像したわけです。茂作じいさんの若い頃のことだよね。そうして、現実の茂作じいさんがいるとこういうことなわけです。じゃあ、茂作じいさんになったら、こんなことをつぶやいてるんじゃないかなって、茂作じいさんの世界に入り込んで書いてもらいたいんです。

山縣　みんな、茂作じいさんこんなんなんだよ、その気持ちを書く。（杖をつき、よろよろと歩く姿を見せる）

長浜　今、思わずことばが出ちゃった、というようなことを書く。

（5～6分時間を取る）

葛西　2～3人ほど発表してもらいましょう。

ふじ　大漁じゃ大漁じゃ。今日は生きのいい魚ばっかりじゃ。

いね　幻の魚を捕りたいなあ。

いけ　若い頃に戻りたい。血が騒ぐ。

（授業時間約１００分）

5．資料整理（イメージの世界へ）

・茂作じいさんのイメージの世界の分類

凡例　◎イメージの世界

○・昔　◎イメージ

●過去　・現実

◎「茂作じいさんの現実逃避」……　いけ

若い頃に戻った。ァァァァァ！ラッキーえ、でも、誰の仕業？　ま、いいや、んなこと。漁行くぞオオオオ！となりのじいさん呼んでこい！　今すぐ海に飛び込みたい！　ウオオオオオ！　海の血がさわぐ

◎「　　」……　たに

今日の魚は、たいりょうだ

きっとうまくいくだろう

◎「　　」……　いね

次はもっと取りたいなあ。

幻の魚が　つりたいなあ

◎「元気な茂作じいさん」……　もと
魚をわんさかとりたいなあ。

◎「　　」……　はす
昔に戻った
今日は、たくさん魚がつれる

◎「茂作じいさん」……　ふじ
—今日は大りょうだ
—ぜったい取ってやる

◎「　　」……　なか
「あの海は魚がよーけおるのぉ。」

◎「茂作じいさんの過去」……　まつ
わしの方が魚をつれるぞ。
ずっと魚をつり続けてやる。

○「　　」……　ふじ
・昔は、日本一の漁師だったのに、もう一度
　やってみたいな～漁を

◎ポーフォフォフォ大漁じゃ大漁じゃ
今日は生きのいい魚ばかりじゃ

○「海と茂作じいさん」……　おか

◎今日はたくさんとれそうだな。
・若い方がいいな、たくさん海に出れて、楽
しかったな。

○「茂作じいさん」……　おり
・昔は魚つりが楽しかったなあ。魚が飛びは
　ねているのをもう一度見たいなあ。笑

◎魚が大漁じゃのう。

●「茂作じいさん」……　はや
　昔のように漁に出たいな。昔は楽しかっ
た。やっぱつるのが好きだった

●「茂作じいさんの日常」……　なめ
「若いころはよかったのう」「昔のわしは、
元気でバリバリ働けとったのに、今じゃ
なぁ」「わしがもう少し若ければ、漁にも出
れて、バンバン働いとったのに。」

●「茂作じいさん」……　まえ
……。
昔みたいに、たくさん魚をとりたいな。
アイツラと一緒に漁がしたい。

●「茂作じいさん」……　やま
—今日は漁が上手くいくかな…（昔）
—昔にもどりたい（現実）
—もう九十五歳か……早いなぁ
—大漁だぁァァ…—はきそう（船よい）

・「　　」……　はま
　もう少し前からかみの毛と歯のケアをしと
けばよかった。そうしたら、このとしになっ
てももてたのに。

・「　　」……　もり
昔みたいに漁に行きたい、海に行きたい。

・「過去」……　おお
☆茂作じいさんの言葉
　もう一度だけでもいい、漁がしたい。
　若いころに戻りたいよ。もう一度だけした
い。

・「茂作じいさん」……　おか
昔はつりの出来る日出来ない日があって、つ
りの出来る日は思いきりつって帰って

・「あのころ」……　きよ
　前あのころはこんな波で漁が大漁だった
な。いそがしいほど魚がたくさんとれて、気
がつくと、船がいっぱいになってたな。前の
あのころは、こんな波で魚がとれなかった
な。なにもすることもなく、くやしかった
な。

・「茂作じいさんの今と昔」……　かわ
「今日はしおがいいから魚がいっぱいとれる
ぞ。」「今日はしおが速いからだめだ。」

・「　　」……　なかたいりょう

（資料整理・中川節子）

6．授業後の協議会から

（老境と体感を中心に、抜粋して構成）

若木常佳（福岡教育大学）　私も、子どもたちと同じようにこの詩に初めてで会いました。授業者と子どもには、教材の理解にずれがあります。授業はそのずれをどのように変革していくか、どのように意識していくのかということがあります。多くの授業者は自分の理解に引き込んでいこうとします。でも子どもの中にあるものというのは（その子なりに）作られたものです。私も、今日は子どもになって考えました。あの詩は未来への継承、未来へつなげるものを残しているのかなあ。だから、「けれども、みんなは知っている。」という文が一番最後になるのかと思っていました。だから、新たな自分がなにかを発揮するという一面では、私にもあったなあと思いました。

山縣明人（岩国短大）　日本語には言語による身体性の誘発がある。「茂作じいさん」を読んだ瞬間に内部にある、子どもにおける老境というものを確実に刺激すると上原先生は思っているわけですよ。だから内部感覚がない子はこれに反応しないんです。

上原先生がなぜ対にこだわったかというと、人間は身体として、ちゃんとした形を持っている。その形が詩に出ているからなんです。この詩の対の構造もレトリックとして出て来たわけじゃなくて、やはり現実と夢というものと、そして現実、そういうものを人間は身体性として持っている。そうしなければ、自分の思いというものは納まらないんだと。心意伝承として。だからあの詩を（上原先生は）買っている。

葛西　年老いた人間の境界、心境ですよね。それに子どもたちがどれぐらい踏み込んでくれるかです。頭で考えるではなく、トランスフォーメーションが起こらないと老境に至ることにはならないだろうと思います。この詩でいえば、2連3連に気づくことで、自分の中におじいさんの心の世界に入る扉があることを感じるのではないかという考え方だったと思います。

秦　恭子（九州大学大学院）　老境を直接説明することにはならないと思いますが、私は、13にも分かれたバラバラのものに対して、こんなに最後までこだわって考え続けると思ってなかったんです。私は結構はらはらしていて、（授業者は）まだひっぱるのかって。だけど子どもは全然平気で考え続けているのですよね。何でこの子たちがここまで作業を続けるのだろうと思ったときに、やっぱりおじいさんだからだと思いました。この詩が若者の詩だったり、全く風景を詠んだりしたものだったら、ここまで続かなかったと思います。はま君は、歯が1本もないことと髪の毛が1本もないことにすごく反応していて、そのことをわが身に感じているんですね。おじいさんの感覚として体感していたから、ここまでこだわったのかなあという感じがします。はま君は笑いが止まらないのですよ。実際にこういうおじいさんに出会ったことある？って聞いたら、「ない」って、「普通何本かはあるよね」ってすごくそこにこだわって。あの二つのフレーズと「九十五歳」とか「白髪」とかおじいさんの身体を表す描写で、かなりの子どもたちはおじいさんに引きつけられて、ぐっとこの詩に誘引されているなあと感じました。おじいさんの原像とかおじいさん像みたいなものがはっきり立ち上がっていて、だから茂作じいさんの心境とか、やっぱりこの詩を完成させたかったんじゃないかなあ。

最後に「かみの毛が一本もない」というのと「歯が一本もない」をくっつけてみていた子どもたちも、これがうーんと離れて、この二つでこの詩ははさまれて本当に

これでおじいさんの詩が完成するんだっていうと、「おーっ」という「えーっ」という声が聞こえたんですよ。それは驚きだしある種の快感というか「うん」というものがあったんじゃないかと思います。

老境についての説明は上手く出来ないのですが、茂作じいさんの境地というものを身体に感じていたのではないかと思います。

小林　指導案の中に時間・空間・人間と書いてあります。授業者が「茂作じいさんと何度も出てくるけど、茂作じいさんといっているのは誰。」と聞いたとき、「村のみんな」と答えてる人がいました。人が生きるとき、お互いに関心を持ち合うとか心の交流とか、思いの伸ばし方ができているんだなあと思いました。

山縣　あの質問は鋭いと思った。作者と答えた子は賢いけど、みんなで見ているという気分が出ていました。

小林　「けれどもみんなはしっている」のみんなは、文章の中のみんなであるけれど、自分でもある。

秦　「なにをいっているのかわからない。けれどもみんなはしっている。茂作じいさんがなにをいっているのか。」これで終わろうとしている子もいました。それもすごく分かります。その時のみんなというのは自分も入っていて、茂作じいさんのことがわかるんだっていうようにしたいんだなあと感動しました。

小林　湧き上がってしまうもの、感じてしまうもの、思ってしまうもの。そういうもあもあしてしまうもの。もあもあしてはっきり言えないけど、確かにある。

＊―湧き上がってしまうもの、感じてしまうもの、思ってしまうもの。これを先の指導案検討の場で、瀬底が「湧くような体感というのかしら、それを茂作じいさんは味わっていて」といっていたのは情緒であって、それは、そのときの小林の発言につながります。「子どもが素直であれば、情緒の組織と躍動と完全さに出会うことができるんだよね。言葉を媒介にして、景色が浮かんで、その景色の中に自分も溶け込んでいって、おじいさんが感じている波の音とか、おじいさんが感じている潮風とか、おじいさんが見ている海の先とか、そういうものに一緒になれる」。このことは、瀬底によれば「だから、詩と言葉って密接なんだなって。言葉を集めるというか、言葉に生きるというか。」という発言になるのでしょう。

2連の、
―しおがいいぞ。
―魚のむれがあるぞ。と、
3連の、
―しおがはやくてだめだ。
―魚は一ぴきもいやしない。

これは、詩の作者が捉えた茂作じいさんの情緒と躍動を、ことばにして構成したものです。言い換えればイマジネーションの発動が捉えた仮想の世界のことです。仮想の世界に深く侵入していた人が「ハッ」として気がついて現実世界に戻ったとき、「かみの毛が一本もない」茂作じいさんは仮想の世界に包まれて元のじいさんではなくなっています。「歯が一本もない」茂作じいさんは、仮想の働きによってこの世界（時間・空間・人間）に人物として定着されたことになります。

1連で捉えている遠景の茂作じいさん。2連・3連の仮想の世界で捉えられた茂作じいさん。そして、4連では遠景であるはずの茂作じいさんに、人はぐっと近づいて内側にまで入り込んでいます。こうしてみてくると、この対で構成されたこの詩の構造は、「老境の推量」という過程そのものを示していると認めることが出来ます。

対象が九十五歳の老人であるから老境の推量ということになりますが、私たちの人物理解の方法は、仮想の働きに委ねられている、私たちにはこれ以外の方法はないということになります。

このことに関連して、かつて主宰が語った談話の記録があるので附記しておきます。

私たちは歴史上の、おきた事実を全て経験しているわけではない。経験しているわけではないが本を読んだりして、自分なりに、そこから仮想し推察する。そしてその上にたって私たちは生活している。ほとんどが推察上にたって生活しているのと同じである。しかし、今の子どもたちは自分自身が見てきたこと、聞いてきた事実、これがほとんどの部分を占めていると思っているだろう。仮想の上に立ち、推察をする、それが人間生活の基盤になっているとは思いもよらないのではあるまいか。自分自身の生活範囲に自信を持っている。自分の生活は自らの生み出したものだと思っている。そこに気づかせていかなくてはならない。（中川　節子氏ノート・年月日不明）

原爆の落ちた夜の物語「夜のくすの木」大野允子を授業で取り上げる意味を語ったときのものです。

（授業展開について・抜粋）

中川　これまでは最初の時間（前時）にバラバラにした詩を整序させ、クラス全員の回答を集計して、本時の授業を組み立てていたのですが、今回はその方法が取れませんから、両方一挙にやることになったのです。子どもたちには、全体の対が捉えられればいいかなあと考えていました。茂作じいさんの対が捉えられたあと、老境に入るために現実から想像に入り、また現実に戻るという予定を立てました。本当はそこが一番やりたかったのですが、尻切れトンボになってしまいました。おじいさんが何かぶつぶつ言っているのはこういうことなんだろうなというのが、あの（2連・3連）対の部分だったんですよね。そこをうんと言わせたかった。

子どもたちは自分の並べ方にこだわり、とてもよく考えていたので、時間を取っても仕方がないかなと思いましたが、正解を出すことで一度区切りをつけ、子どもたちの反応（意識）を整理しなくてはならないと思いました。対という構成に気づくことと、イマジネーションを自分の言葉にすることを合体させた授業だったので、無理があったと思いました。ただ、子どもたちの反応は良くて、私たちの整理能力が追いつかなかったという感じがします。

＊（2・3連）の中と（1・4連）の外との対の関係が明らかになったところで授業者は「現実で想像をサンドイッチ」していると子どもたちに語っている。詩の形式としてはそう言えるにしても、実は仮想世界が現実を包み込んでしまうという、転換が生じていることに気づいてもらわなくてはならない授業だった。

・授業者・発言者は実名で、子どもたちは、仮名をひらがなで示しました。

（東京・元私立聖徳学園小学校教諭）